

# 埼玉の天気占い

— 占いの行事、そして自然からの発信 —

柳 正 博

## はじめに

平成11年の夏は、例年にない猛暑だった。8月3日には越谷で38.5度にもなり、この月の真夏日（気温が30度以上を記録した日）は、浦和、越谷の27日間を最高に県内8地点で20日以上を記録した。27日間といえばほぼ毎日が30度以上で、まさに驚異的な数字ではなかろうか。9月、10月になっても気温の高い傾向が続き、ようやく11月になって涼しくなったと思った途端にからっ風が吹き荒れ、一気に冬の訪れを感じるようになった。建物が老朽化した当館では窓ガラスに当たる強風が一日中ガタガタという音を立て、よけい寒々しく感じるありさまである。前年夏らしい日何日もなかったと思ったら、平成11年は秋を感じさせる日いく日もなかったようであるが、冬になっても平年を上回る暖かさで、いったいこの先どうなるのであろうか。

こうした天気の変化は、単に暑さ・寒さというだけでなく、経済にも深刻な影響を与える。冷夏だった平成10年はエアコンがさっぱり売れず、ビールや夏物衣料、家電業界等は当てが外れたことだろう。逆に翌年の猛暑はこの人々にとっては笑いが止まらない状況と推察し、お天道さまが前年苦渋に満ちた分まで埋め合わせてくれたかのようなのである。しかし、この夏は猛暑だけでなく、8月の集中豪雨では神奈川県河原でキャンプをしていたパーティーが事故に遭い、多くの犠牲者が出た。県内でも8月14日の熊谷地方気象台管内における14の観測地点のうち、7地点で過去最高の降水量を記録した。そしてこの豪雨により大滝村のキャンプ場で約240人が足止めされたり、飯能市では大雨で崩落した土砂で線路が埋まり、鉄道が復旧に半月かかるなど思わぬ被害をもたらせた。

このように、科学技術が発達した現在でも天気ばかりはいかんともしがたく、自然の脅威にさらされる前に天候の変化を予知し、極力その状況に応じた構えをとることが望まれる。ましてや一時代前の「農業はお天気しだい」という世の中では、作物の出来・不出来を左右する天候の変化には機敏に対応しなくてはならなかった。そこで、いち早く天候変化を予知するため、天気占いをしたり、長年の観察によって周囲の変化から天候の移り変わりを判断し、天気俚諺として後世に語り継ぐなどの工夫がなされてきたのである。日本人はお天気好きといわれ、あいさつに「よいお天気ですね」とか「よく降りますね」という言葉が多く用いられる。これが無難なあいさつといってしまうえばそれまでであるが、天気に関心が深いことは事実であり、こうした一面も天気俚諺が定着する素地となっているのではないかと思われる。

ここではこうした日常生活になじみの深い天気について、これまでに人々がどのように予見してきたか、行事や言い伝えを中心に調査し、若干の考察を試みようとするものである。

## 1 問題の所在

平成6年度に埼玉県立博物館で、「観・天・望・気—お天気の文化史」という特別展が開催された。この展覧会は、天気に関する知恵や祈りについてまとめたもので、筆者もその担当者の一員としてその企画に参画した。このなかで、筆者は天候予知の方法を担当し、地域の行事として今も伝えられている天気占いや、天気俚諺を取り上げた。天気占いは、年頭に行われる弓占や粥占、豆占などの結果からその年の空模様を判断するものであるが、ここではまず、こうした県内に伝わる天気占いを紹介し、それが実際にどのように活かされてきたかについてたどろうとするものである。

次に、天候予知としては、雲の動きや風の向き、あるいは辺りの動物や植物の様子など、自然現象をもとに長年の経験によるデータから判断する方法がある。こうした成果は、天気俚諺として後世に伝えられている。昭和51年に新潟県糸魚川市教育委員会で発行された『わたしのこつ』という書物には、これを的確に表しているくだりがあるので取り上げてみる。

今のようにテレビもラジオもなく、天気予報はすべて自然の観察で行った。私が子供のころ、孫ばあちゃんからきいた天気予報は奇妙に当たり、本当に感謝している。今でもこの地方の天気はテレビよりこの孫ばあちゃんの教えに頼っているが、大体確実である。

この部分を読んだだけでも日ごろから天候の変化をできるだけキャッチしようとする姿勢がうかがわれる。この地域で伝承されている言い伝えの一例は、次のとおりである。

- 日の出のころ、東の方に赤い雲が出ると、大体午前10時までに南風が吹く。
- 天気が下り坂に向かう場合は、電化（鉄道か？）の方から音がよく聞こえる。

こうした言い伝えが普及する背景には、次のような状況がおかれていた。

百姓仕事は天気に左右されるから、この天気予報の上手・下手はなりわいに大きな関係もあった。それだけに昔の人たちは自然の観察にはきびしかった。眼でどんな変化も見逃さず肌でそよ風の動きも決しておろそかにはしなかった。

このように、天気がなりわいと密接なつながりをもつ以上、作物の豊凶と切っても切れない天候を予知することは栽培上重要な要件としてとらえることができる。それだけに人々の気持ちも切実で、あの手この手で天候変化の予兆を見いだす努力をしたにちがいない。近世のころは名主が「日和見機能」を果たし、天気にはことのほか注意を払っていたという。作物の生育は天気に左右されるのはもちろんであるが、せっかく育てた作物が一瞬の風水害で水泡にきさないと限らない。そのため、空模様ということは常に脳裏から離れることはなかったと考えられる。年の初めに天気を占い、その年がどのような状況か把握することはもちろん大切であるが、人々はそれに頼るだけでなく、ふだんから自然の観察を決しておろそかにしなかった。今と異なり、学術的に云々というレベルでの分析には至らないが、日常生活を地道に観察し、長年の集積によって一定の法則を見出すという、いわば生活の知恵である。そこで編み出されたデータは連綿と語り継がれて、しかも経験による裏付けがあるから、地域の人々への説得力は絶大である。こうした天気俚諺としては、「朝焼けは雨、夕焼けは晴れ」とか「月笠は間もなく雨になる」というように世間一般に伝えられているものもあるが、県内に伝えられているこの種の諺を一部紹介した上で、地域性を表すもの、もっ

といえ地域によって予知の指標に特色が現れるものを述べてみたい。たとえば、その指標は山であったり、鉄道であったりするが、ここではこうした要素から経験則として地域に定着した天気俚諺とその広がりを探ることとする。

## 2 天気占いの行事

天気占いは主に地域の年中行事の一環として行われ、その時期はおおむね小正月や節分に集中している。占いの方法としては、①弓占（弓で射った矢が的のどこに当たったかにより、その年の天候を判断する）、②粥占（篠などで作った管を簾状に結わえ、粥といっしょに煮て、粥の付き方で作柄や月々の天候を占う）、③豆占（節分に12個の豆を囲炉裏に並べ、豆のこげ方によって各月の天候を占う）がある。ほかに、炭占と称して、いろいろな種類の木を焼いてそれでどんな炭ができたか見て天候を判断する方法などがある。

本章では、主として弓占と粥占について述べ、併せて県内や周辺地域で傳承されているその他の占いについてもふれてみたい。

### (1) 弓占

埼玉県内の弓占といえ、オビシヤが顕著である。この行事は弓矢で的を射ることによってその年の吉凶や豊凶を占ったり、五穀豊穡や厄よけを祈願する行事である。オビシヤは一部で弓を射らない場所もあるが、「的射・宴会・当番渡し」を要素とする春の祭りで、埼玉では江戸川流域を中心に分布する。オビシヤに限らず、県内で行われている弓占のうち、主に天気占いの要素が前面に出ている事例は、荒川左岸に近い鴻巣市滝馬室のマトウサイ（的祭）や右岸の川越市下老袋、氷川神社で行われる「老袋の弓取式」、秩父の山間地域である両神村と小鹿野町で行われる「出原の天気占い」（両神村薄）、「伊豆沢の天気占い」（小鹿野町伊豆沢）などが挙げられる。行事名が「天気占い」と呼ばれるものは秩父地方の二例のみである。天気占いがなぜこの二地域にのみ分布するのか定かでないが、いずれも弓占の結果は作付の目安として重視されたという。ここでは、以下の三例について述べることにする。

#### ア 老袋の弓取式（川越市下老袋）

「老袋の弓取式」が行われる川越市下老袋の氷川神社は、市街地から4 ㎞ほど離れた郊外にあり、すぐそばを荒川、入間川が流れるのどかな田園地域である。この行事は現在2月11日に行われているが、二月正月だったころは正月11日の行事であった。老袋の上・中・下、それに東本宿に住む氷川神社の氏子によって行われる弓取式は、四地区が二つに分かれて役割分担する。ひとつは、下老袋が中心となり東本宿が賛助する「甘酒を醸す」役割、もうひとつは中老袋を中心に上老袋が賛助する「豆腐の田楽の調製」である。こうして甘酒宿と豆腐宿というように二つに分かれて神饌物の準備が行われる点は、この行事の特色と考えられる。祭り当日は、二つの地区を出発した一行が神社の鳥居付近で合流して参道を進む。境内に設けられた的（むしろに紙の的を貼る）に向かって弓矢を射るのは、ユミトリ（弓取り）である。古くはこの地域の草分け的存在の家系でユミトリを行っていたが、近年は5人の氏子総代が行うようになった。ユミトリに弓を渡すユミトリッコ（弓取りっ子）は、もとは家柄で決められていたが、これも現在は氏子の子弟のなかから希望する子どもが選

ばれている。弓取式では、晴れ着をまとったユミトリッコが昇殿してユミトリのかたわらに座り、弓矢をユミトリに手渡す。ユミトリは、紋付き・袴姿でユミトリッコに代わって的に向けて射る。的射は一人3回で、最初は春、次が夏、その次は秋という順に射り、天気を占う。弓矢が的の黒い部分に当たった場合は雨、白い部分は晴れが多いとされ、その結果は作付の有力な資料とされた。すなわち、晴れの日が多いと占った年は大豆、反対に雨が多いと占った年には里芋や陸稲、ささぎ等の水に強い作物を栽培するなど占いの結果に即した作柄を工夫した。

なお、最後のユミトリが終わると、参詣者が先を争って弓矢を奪い合った。この矢を家に持ち帰れば縁起がよいといわれたためである。

#### イ 出原の天気占い（両神村薄）

秩父郡両神村薄の出原耕地は県北西部に位置する山間地域で、荒川の支流、薄川に沿って集落が形成されている。

「出原の天気占い」は例年2月25日（第二次世界大戦前は旧暦、以後は新暦で実施）に執行される行事である。この行事を「出原の天気占い」と呼ぶようになったのはさほど古いことではなく、従来諏訪神社の神事の一環として行われてきた「お祭り」が、的射と天気占いの要素があったため「天気占い」と呼ばれるようになったという。この行事の起源は、諏訪神社の御神体が台風で流されて下流で打ち上げられ、氏子が出向いたところ、「昔から続いている弓矢の行事を行い、シトギ



写真1 老袋の弓取式



写真2 弓取式の的



写真3 出原の天気占い



写真4 天気占いの結果発表

を供えてくれるなら元の社へ帰ってもよい」というお告げがあり、それに基づいて今も行っているという伝承がある。そのため、この祭りには必ず氏子がシトギを供えている。

天気占いは、今でこそ出原の全戸が参加しているが、第二次世界大戦前までは「堂元」と呼ばれる旧家を宿に行われていた。現在は行事（5人1組）が順番にヤドマイ（宿）を務めるようになっている。ヤドマイは素性のよい桃の木（2本）を見つけ、皮をむいて中央へ和紙を巻き、麻ひもで3か所結わえる。そして桃の木を曲げて麻ひもの弦を張り、弓を作る。矢は篠を素材にするが、曲がったものでもそのまま用いる。矢は小鷹神社と諏訪神社に奉納するものをそれぞれ作るが、矢羽の柄は異なる。的は割り竹を円盤状に編んでその上へ和紙を貼り、三重丸を描いて上にする方へ「上」という字を書く。こうして準備が整うと、弓矢等は天気占いの日までヤドマエの家に置く。

祭りの当日は午後1時ごろから祭典が始まり、その後本殿の前にむしろを敷いて座布団を2枚並べる。そこへ二つの神社の射手が1人ずつ座り、弓を射る。弓はひとり2本ずつで、3組交代で行う。弓を射る家は決まっていて、それぞれの世帯主が行うしきたりである。弓占いは、12本の矢が的のどこに当たるかによってその年の天候を判断する。すなわち、的の白い部分に当たれば晴れる日が多いとか、黒い部分ならば雨が降りやすいなどと占う。また、的を外れると大風が吹き荒れる年になると占うのである。占いの結果は、当日の参集者に対して行事の代表者から年間の予想として発表される。かつては、農家はそれを作付の基準とし、晴れる日が多い年と判断された場合は粟、逆に雨が多いと予想された年は稗を作るようにしたものである。ちなみに、本年は3、4月に雨が多く、5月は晴れ、梅雨は短いと9月に大きな台風があり、冬は暖冬という結果が出た。

#### ウ 伊豆沢の天気占い（小鹿野町伊豆沢）

小鹿野町伊豆沢は町の西部の谷間の集落で、両神村と境を接している。諏訪神社で行われる天気占いの起源ははっきりしないが、諏訪神社と同じ社地にある文殊堂の縁日でにぎわう2月27日に行われていた。しかし、近年はどちらも2月11日に移行した。天気占いは、宮元と呼ばれる3軒で行われる。準備は現在2月9日に行われ、厄よけとされる桃の木で弓を作り、麻ひもで弦を張る。矢は篠を用い、和紙製の矢羽をつけて8本作る。的は氏子が作り、直径約180㍍の編み竹のわくに墨で三重丸を描いた和紙を貼る。

宮元三家は紋付・袴をしつらえ、社殿に納められた弓矢を受け、沢向こうの2本のしめ杉の間に



写真5 伊豆沢の天気占い

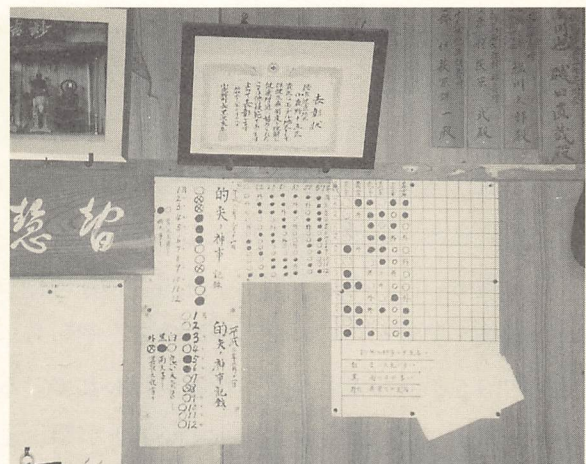


写真6 占票

立てられた的に約10m離れて向かう。射手は初めに悪魔払いの矢を2本射り、次いで6本の矢を交代で射って12か月の矢を射る。矢が的の白い部分に当たれば晴れ、黒い部分は雨、的外れは風が多いと占う。占いの結果は写真6のようにして集約され、氏子に広報する。そして、そのデータをもとに作付の目安とされたのである。本年は、白が1、5月、はずれが2、4、10月、他は黒い部分に当たったというが、どうなるであろうか。

## (2) 粥占

粥占いは、正月15日前後に集中して行われる。その年の作柄や天候を占うほか、世相を占うところも見られる。平成12年1月14日の夕方、TBSのニュースを見ていたら、お天気コーナーで大山阿夫利神社の筒粥が紹介されていた。ここは作柄の結果からその季節の天候を判断するようで、ことは春（あわ八ト）は「春先は順調」、夏（わせ三ト）は「大雨か干ばつか油断ができない」、秋（そば四ト）は「台風は平年より多い」という御託宣で、総じて「あまりよくわからない、不順」ということと報道された。県内には、川越市石田の藤宮神社、小鹿野町藤倉の諏訪神社、神川町二宮の金鑽神社、寄居町風布の釜山神社、大滝村の三峯神社、菖蒲町上栢間の神明神社、川里村広田の鷲栖神社でそれぞれ筒粥が行われる。天気占いの要素としては、大山阿夫利神社のように作柄の結果から判断するもの、たとえば、川里村の鷲栖神社ではごまや木綿の作柄がよければ好天、晩生稲が不振のときは夏涼しいといわれる。菖蒲町の神明神社のオヒタキでは粥を煮る際に吹きこぼれが多ければ雨が多く、鍋がこげつくと日照りになると占っている。これに対して、雨や風、それに月々に見立てた12本の管に付着した粥の状態によって天候を占うところがあり、その判断は長年の経験がものをいう。こうした占いはほとんどが神社の行事の一環として行われているが、次に示す小鹿野町の諏訪神社では地域の人々による行事として今も引き継がれている。

### ア 諏訪神社の管粥（小鹿野町藤倉）

小鹿野町藤倉の諏訪神社は、荒川の支流赤平川のさらに支流の藤倉川に沿って形成される馬上耕地に鎮座する。東京新聞の昭和56年2月11日付けの埼玉版には、「さいたまの技と芸」と称して諏訪神社の管粥の様子が次のように記載されている。

山が険しく谷が深い秩父地方は耕地面積が狭いうえ、農作物の出来、不出来は天候に大きく左右される。雨の多い年に日照りに強い作物を植え付けたのでは、農家は破滅だ。このため、年初めには作物の当たり違いを占って神の御託宣によって作付の目安とする風習があった。（中略）馬上地区は、小鹿野町の西北にあり、民家は群馬県境の山から流れ出す藤倉川のV字谷の底や山腹、斜面に点在している。（中略）険しい谷沿いとあって耕地は山の斜面に開かれ、文字通り「耕して天にいたる」地だ。このため、狭い耕地でより多くの作物をと1年間の作柄と天候を占う管粥が続けられてきたのだ。

この粥占いの行事は、例年1月14、15日に行われる。行事の創始については明らかでないが、占いの結果を記録したものをさかのぼると昭和37年までで、それ以前は記録がないという。この地域では明治5年から榛名神社へ代参が行われていると伝えられるほか、明治20年生まれの人が親に聞くと、親より前の世代から行っているといい、これらからおおよその時代が推測されよう。先に述べたとおり、多くの粥占は神官によって執行されるが、馬上の管粥は神官をまじえずに行われる点

が特色である。行事は、まず14日の午後諏訪神社に役員が集まり、作業の分担を相談する。これにはカミ・シモから選ばれた6人の行事と「小回り」と呼ばれる補佐役（4人）が回り番で務める習わしである。準備は、経験豊富な古老と役員が14日の午後1時ごろ諏訪神社に集まり、初めに管粥の材料にするシンコの篠竹と、それをつなぐオッカゾ（楮）を手分けで採集する。社務所では篠竹を10cmほどの長さに切り、先を斜めにして45本の管にする。次いで、それを12本（12か月）と33本（農作物30種類と雨、風、大世を占う）に分けて、それぞれ上下をオッカゾの縄で簾編みにする。その後、12か月を心にし、その外側に農作物、さらに雨・風・大世を占う管という順序で巻き付ける。その後、管巻きを白木椀の中に立て、三方にのせて神前に供える。そのうち、ころあいを見て各家から五勺程度の米を半紙にオヒネリにして管巻きが上げられている神前に供える。こうして準備が整うと、いったん帰宅する。そして、午後7時になると、寄せ太鼓の合図とともに再び人々が集まる。まず、古老がお祓いし、全員で御神酒をいただく。次に、氏子が奉納したオサゴを神前から下げて白木の椀に盛り、平らになるまでならず。そのオサゴは鉄鍋に入れ、白木の椀で8杯分の水を入れて、その上に管巻きを立てて新たにおこした囲炉裏の火にかける。ほどなくすると、粥が煮え、泡が上がってくるが、管が見えなくなったところで鍋を火から遠ざける。このしぐさを3回繰り返した後、鍋から管巻きを取り出して神前に一晚供える。その情景を東京新聞は次のように表現している。

やがてナベの中は沸騰し、アワが盛り上がり、管巻にかぶさるようになる。「この吹き上げを三度したらナベを火からひっこめる。この火ではたばこもつけられねえんだ」（伝承者A氏）吹き上げがすむと管巻はオワンに移し、おかさにのせて神前に供え、翌朝まで手をつけない。「神さまが一晚中お天気や作柄を占ってくれる」わけだ。

管巻きを取り出した後の粥は、子どもが食べると無病息災だと伝えられている。こうして地域の人々が囲炉裏の回りに集まり、歓談するうちに夜も更けていく。こうした光景を見ると、行事の中に世代間の交流が感じられ、今の社会で欠けているものがここには機能しているように思える。

翌日は夜が明けて境内の神木杉に日がさしかかるのを見て、神前から管を取り出し、占いを始めたという。しかし、明治の終わりにその杉がなくなると、午前8時を目安に行われるようになった。午前8時といっても山間のしかも谷間の冷たい風が吹き上げる場所に位置する社殿は厳しい寒さで、



写真7 泡が上がり管巻きにかぶさる



写真8 管巻きを取り出す





なお、平成12年の占いの結果は、稲や麦、そばの作付に適し、菜種梅雨は長めで、大世は文句なしという御託宣ということであるが、いかがであろうか。

イ 藤宮神社の筒がゆの神事 (川越市石田)

藤宮神社は川越市の北部に位置し、周囲を水田に囲まれた地域である。この神社で例年1月15日に行われている「筒がゆの神事」は「かゆうら」ともいい、その年の作柄と天候を占う行事である。かつては午前0時を期して執行されたというが、現在は午前6時から行われている。この時刻が近づくと氏子が境内へ集まり、社殿前に設けられた釜で小豆粥を煮る。粥は、水1斗に米1升、小豆1合の割合である。これに7寸に切ったヨシを18本すだれ編みにした筒を入れて煮る。その後、神官が2本の粥かき棒が筒をはさみ、粥に2回浸す。それが終わると釜から筒を取り出し、神前に供える。そして、18本の筒を1本1本割り、中に残った米粒の数によって作物の豊凶や天候を占うのである。ちなみに、18本の内訳は、大麦・小麦・大豆・小豆・大角豆・早せ・中て・晩稲・あわ・ひえ・木綿・芋・菜・大根・そば・雨・風・日である。平成12年の占いの結果は図2のとおりで、氏子に配布される。各家で受けてきた占票は、神棚に供えたという。

なお、この粥の味付けは塩味で、粥を食べれば虫菌を防ぐことができると伝えられている。

日	風	雨	早	中	晩	あ	ひ	あ	中	早	大	小	大	小	大	藤宮
六	四	〇	三	七	三	三	〇	一	一	〇	一	六	〇	〇	〇	大
ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	神

図2 藤宮神社筒がゆの神事占票



写真11 筒をかき回す

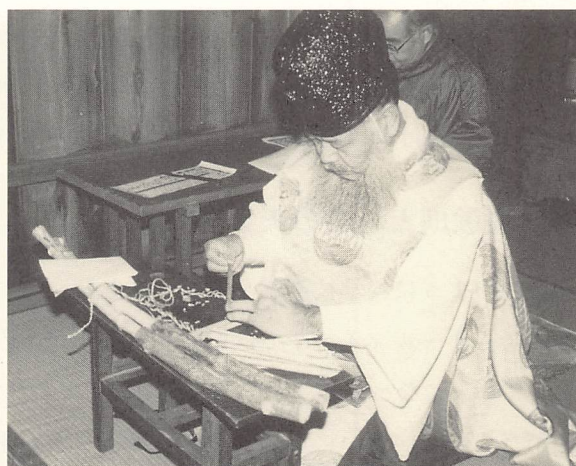


写真12 筒を割って判断する

阪神大震災があった平成7年以降、占いの結果はあまり芳しくないという。平成10年は「雨多い年」という結果で、実際に冷夏となったことは記憶に新しい。平成12年は早稲・小麦・大根はまあまあであるが、大豆や小豆などは不調、天候は日が16トで、降水量は少なめという御託宣である。

### (3) その他の占い

豆占いは、1粒の豆を1か月に見立て、1年すなわち12個の豆を囲炉裏の灰でこがせてその焼け具合を見て各月の天候を占うものである。つまり、豆が白ければその月は天気がよく、黒くこげれば悪いと占うのである。たとえば、長野県下高井北部では1月15日と2月3日に囲炉裏へ豆を並べて焼き、そのこげ方で1年の天候・作柄を占うものである。新潟県山古志村では豆まきが終わると囲炉裏の灰をならして小さな溝を作り、その中に12個の豆を入れる。そしてその豆の焼け具合から月々の天候を占うもので、豆が白く焼ければ晴れ、黒ければ雨、半分黒いのは月の上旬が雨と占っている。福島県二本松市には、豆占の結果を「節分焼天気予報」として屋内に掲示して農業の目安にした場所がある。長野県小諸市与良では月の初めに豆を火鉢にくべ、よく焼ければ晴れが多く、くすぶれば雨の日が多いと占っている。これに対して埼玉県内では、桶川市川田谷で豆占いを行っていたというが、ここでは節分の豆まきの折りに豆を12粒とっておき、1粒ずつ火鉢にくべてその煙りの立ち方で12か月の天候を占ったという。

少し異なる事例として、ハシで天候を占う方法がある。長野県下水内、中野では1月15日に前年の小豆粥に用いたハシ（1月から12月までを占うハシをあらかじめ決めておく）を順に焼き、煙が出ると風が多い、泡を吹くと雨が多く、そのまま何も出ずに燃えれば晴れが多いと占う。

また、炭で天候を占うところもある。千葉県安房神社で1月14日に執行される置炭神事は、忌日を新たにきり出し、15日の粥占神事のための粥を煮るとき、炭火の旺盛なもの12か所を取り出して2本の薪の上へ置き、それを12か月に割り当てて炭の燃えつき方で各月の天候を占うものである。長野県上伊那地方では、1月15日の夜、粥を煮たあとの火の燃料が炭になったのを出してその状態で月々の天候を占う。その炭が白いときは晴れ、黒は雨、少しの間消えない場合は風の多い年だという。こうして見ると、豆や炭による占いも多少のバリエーションはあるものの、1月15日か2月3日に集中していることがわかるが、管見の限りではハシや炭を用いた天気占いは埼玉には見られない。このほか、和光市では七夕でマコモの馬（七夕馬）を作る日にたとえ1粒でも雨が降ればその年水不足に苦しむことはなかったといっているし、栃木県小山市大本の篠塚稲荷神社では旧暦2月の初午に飾り馬を立てて五穀豊穰や家畜の健康を祈願する。このとき、馬の毛色が栗毛ならば晴れが多く、黒ければ雨の多い年になると占ったといい、馬による天気占いも行われたことがわかる。

## 2 経験則としての天気予報

現在のように科学技術が発達し、気象観測においても格段の進歩をとげたとはいえ、天気予報は必ずしもオールマイティではない。気象予報士の報道を鵜呑みにして傘を持って出かけたにもかかわらず好天になったり、逆に思わぬ雨に見舞われて濡れたりし、「こんなはずじゃなかったのに」というくやしい思いにかられたことは少なからずあると思う。埼玉県の場合は現在、南部・北部・秩父地方という3地域に分けて予報し、少しでも実状にあった情報の伝達に努めている姿勢がうか

がわれる。しかし、先日も某放送局で取り上げていたが、県北の一部の地域では、「どうも群馬県の予報を見た方が確かなようだ」という感覚があるというし、天気は行政区域だけで割り切れるものではない。一般に、「夕焼けになれば、明日は天気」という感覚はだれしも備えており、天気図によらず周囲の変化によって天候を予知する方法は、天気俚諺となって人々に定着している。これらの諺は民俗の上では、民俗知識として扱われている。文化庁監修による『日本民俗資料事典』では、民俗知識を「とくに学問的な体系を与えられたわけではない。ただありふれた普通の、しかも日常生活に密着した、素朴な生活の知恵のことである」と説明している。そして、天候や気象については、「生産にあけ生産にくれる一般民衆の日常生活に大きな影響を与えたから、その観測や予知については、昔から頭をなやましたにちがいない。ある程度の科学性をそなえた知識も利用されたが、その乏しさを補うためウラナイに属する方法も、しばしば用いなければならなかった。もちろん積み重ねられた体験からくみとられた知識のなかには、科学的な結論として信頼されるものもあった。このような貴重な知識は、しばしば諺の形式をもって伝承されることが少なくなかった。」とし、気象の内容に①風、②雨、③雷、④地震が挙げられている。これまでに県内で刊行された民俗知識に係る論考を見ると、昭和56年に発行された『八潮市史研究第3号』に掲載されている田中正明の「民俗知識少考」によく整理されている。このなかで、気象の変化を予知する方法として、①自然現象によるもの、②動物・植物によるもの、③その他によるものというように分類されており、本章でもそれに基づいて一例を整理してみよう。

#### (1) 自然現象によるもの

自然現象といえば、ほとんどが大気の状態から判断している。太陽の光、霧、風、雲などが主な要因で、川の音、滝の音という言い伝えもあるが、これらの音がよく聞こえるときは空気中の水蒸気が多かったり、雲が低く音が反響するなどが考えられる。逆に天気がよい場合は、音が上空に逃げるので、よく聞こえないという。

- 夕焼けは晴れのしるし、朝焼けは雨のしるし。
- 朝虹は雨、夕虹は晴れ。
- 朝霧が多いと天気がよい。
- 月が笠をかぶると、天気が悪くなる。
- 入道雲がたつと、雨が降る。
- 滝の音がいつもより大きく聞こえると、じきに雨が降る。
- 西風は天気、東風は雨。

たとえば、行田市埼玉では小針の煙突（焼却場）の煙がなびく方向で天気を判断している。すなわち、東へなびけば好天、西の方角に煙が流れれば悪天と予想しているのである。

- 川瀬の音がよく聞こえると、じきに雨になる。

この具体例として、上里町八町河原では、「利根川の音がいつもとちがって高く聞こえると、シタケ（東風）だから天気が悪くなる」といつている。

#### (2) 動植物によるもの

動物は、昆虫からは乳類に至るまで多岐に及んでいる。「民俗知識少考」で田中正明も指摘しているように、同質に見えるものでも微妙な差異がある。次のように鳥が鳴くことはよい天気につながっているが、単に鳴く場合、夜鳴く場合というように観察の深度のちがいが表れている。植物は、花の開花に異常があると、天候変化をきたすことが多いというように考えられる。

- みみずが道をはっていると、天気が変わる。
- 鷹が夜鳴くと翌日は天気がよい。
- ふくろうが鳴くと、天気になる。もずが鳴くと天気になる。
- 鶏が夕方早くねむりにつくると翌日は天気がよい。
- 鳩が鳴くと雨が降っていても数時間後には晴れる。
- 燕が低く飛ぶと雨が降る。
- もぐらが畑を掘ると雨が降る。
- 猫が顔をこすると翌日は雨。
- 池の鯉がはねると雨。
- 蟻が行列をつくって動くと雨が降る。
- 蛙が鳴くと雨が降る。
- けやきの芽がむらに出る時は、嵐が多い。
- さといもの花が咲くと嵐になる。

### (3) その他によるもの

自然現象や動植物の変化による諺は伝承地域が埼玉に限られたわけではなく、一般に通じるものがほとんどである。

- 囲炉裏の自在鉤が湿ると雨が降る。
- 水がめや台所の石が汗をかくと雨が降る。
- 家の基礎になっている玉石がびっしょり汗をかくと雨になる。

なりわいはなりわいでも、農業のほかに交通に携わる人々にとっても天気は重要な要素である。現在でも霧で鉄道が遅れたり高速道路が通行止になったりする。最近では雪に弱い首都圏の鉄道ということが取り沙汰されている。筆者も2年前の大雪の際に浦和駅から大宮駅まで通常なら7分のところを延々3時間かかってたどり着いた苦い経験がある。混雑した車内に立ちどおしで、いつ発車するか見通しがつかずイライラしている気持ちは現場に居合わせたものでなければ理解できないだろう。それはともかく、かつて河川交通が行われていたころ、船頭はことのほか天候の変化には敏感にならざるをえなかった。「板子一枚下は地獄」といわれるとおり、水運がまさに自然の脅威にじかに接していたのである。『大利根町史民俗編』は、こうした船頭による観天望気が報告されているのでここに取り上げる。

- 太陽が沈むときに赤く見えると翌日は晴れる。
- 太陽が雲の中に沈み東風が夕方遅くまで吹いているときは、翌日雨。
- 春先に東風が吹いて夕方まで止まらないと翌日は雨。
- 西の山が鏡をふいたようにきれいに見えるときは西風が吹く。

- 赤城山辺りからしきりに雲が飛んでくると風が吹いてくる。
- 雲がぼやけてかすんで見える風は吹かない。
- 雲がちぎれてくると西風が吹く。
- 井戸の下から湯気が上がる時は天気がよく、風も吹かない。

この伝承は、おおむね周囲の景観から一定の変化を見つめたものであり、井戸の湯気までよく観察されたと思うのであるが、いずれも確実なデータとして重用されたものであろう。

これまで見てきた一連の言い伝えは、普遍的なもの地域限定のものに分類できる。そこで次に、地域性が顕著に現れている俚諺について考えてみたい。その要素の代表格は、山や鉄道である。

## ア 山

山は人々の目に止まりやすく、昔から親しまれている。そのため、毎日見ている山の状況によって天候変化を察知する手立ては先人から伝えられた天気俚諺となって定着している。山に雲がかかれば、大気の状態に変化があるものと推測され、長い間の観察に基づいた模範解答が導き出されているのである。判断の対象となる山は地域によっておのずと決まっており、山が地域の人々に向かって語りかけ、天気情報を流しているのである。

### (ア) 好天の予測

- 秋に秩父の山が朝や夕方はっきり見えれば天気になる。 [上福岡市]
- 秩父の山が見えれば晴れ。 [羽生市川俣、騎西町種足]
- 筑波山が拝めれば天気よし。 [羽生市喜右エ門新田、春日部市、白岡町]
- 雨降りでも陣見山の雲が切れて動きだし、山が見えるようになれば天気がよくなる。 [児玉町]
- 赤城山が見えるとよい天気になる。 [羽生市新郷]
- 朝、浅間山が見えれば天気よく風が出る。 [羽生市下新郷]
- 浅間風は天気。 [滑川町]

好天の予測として伝えられているものは、意外に少ない。同じ山を見る場合でも地域によって差異が見られ、単に秩父の山が見えればよいという判断のしかたと、秋・冬、それに朝・夕方という条件のつくところがある。なお、県外の周辺地域には次のような事例がある。

- 富士西に雲がないと、明日天気になる。 [館林市三野谷地区]
- 朝早く起きて男体山がよく見えるようであると、その日は天気がよい。 [小山市]

### (イ) 悪天候の予測

- 富士山に笠がかかると、雨になる。 [戸田市、和光市]
- 富士またぎの虹は、天気が悪くなる。 [蕨市塚越]
- 富士またぎの虹は、大水になる。 [桶川市加納]
- 富士南に入道雲が出ると、三把稲。 [白岡町]
- 富士前に雲が出れば、早い。 [鴻巣市]
- 富士南は雲が早い、麦三把丸くうちにくる。 [鴻巣市]
- 大山先（神奈川県）に入道雲がかかると雨が早いといい、雷がくる。 [上尾市平方]
- 板倉（群馬県）から雷がくると雨が多いので、干し物をしまえ。 [上尾市平方]



写真13 煙が西になびく（雨だ）



写真14 秩父の山々



写真15 陣見山



写真16 御荷鉾山

- 麦刈りのころ、大山の上に変な黒雲が出ると、麦を三把かたづける間もないくらいに早く夕立がくる。これを「大山の三把ガミナリ」という。 [三芳町]
- 十二天山や陣見山が朝雲で見えなくなると、その日のうちに雨降りになる。 [児玉町]
- 朝、十二天山や陣見山が見えないと、その日は雨になる。 [美里町小茂田]
- 富士南の方角に雲が流れると、雨が降る。 [日高市高麗本郷、元宿]
- 秩父の入道雲が出ると、雨になる。 [和光市]
- 外秩父に雲がかかれば、雨。 [大宮市宮ヶ谷塔]
- 笠山に雲がかかれば、雨。 [鳩山町今宿]
- 雲が秩父の方へ行くと、雨。 [川越市]
- 武甲山の向こうに雲が行くと曇るか雨。 [秩父市久那]
- 和名倉山の頂上に雨雲がたち、しだいに中腹に延びてくると、すぐ雨に見舞われる。 [大滝村三峰]
- 日野沢山の三束雨。 [皆野町国神]
- 日野沢の方が暗くなると、三束雨。 [皆野町三沢]
- 大霧山の霧が下に流れると晴れ、上に流れると降る。 [皆野町三沢]
- 夏、麦刈りをしている間、御荷鉾山に入道雲が出ると、「三束雨」といって、麦束を三束たばね

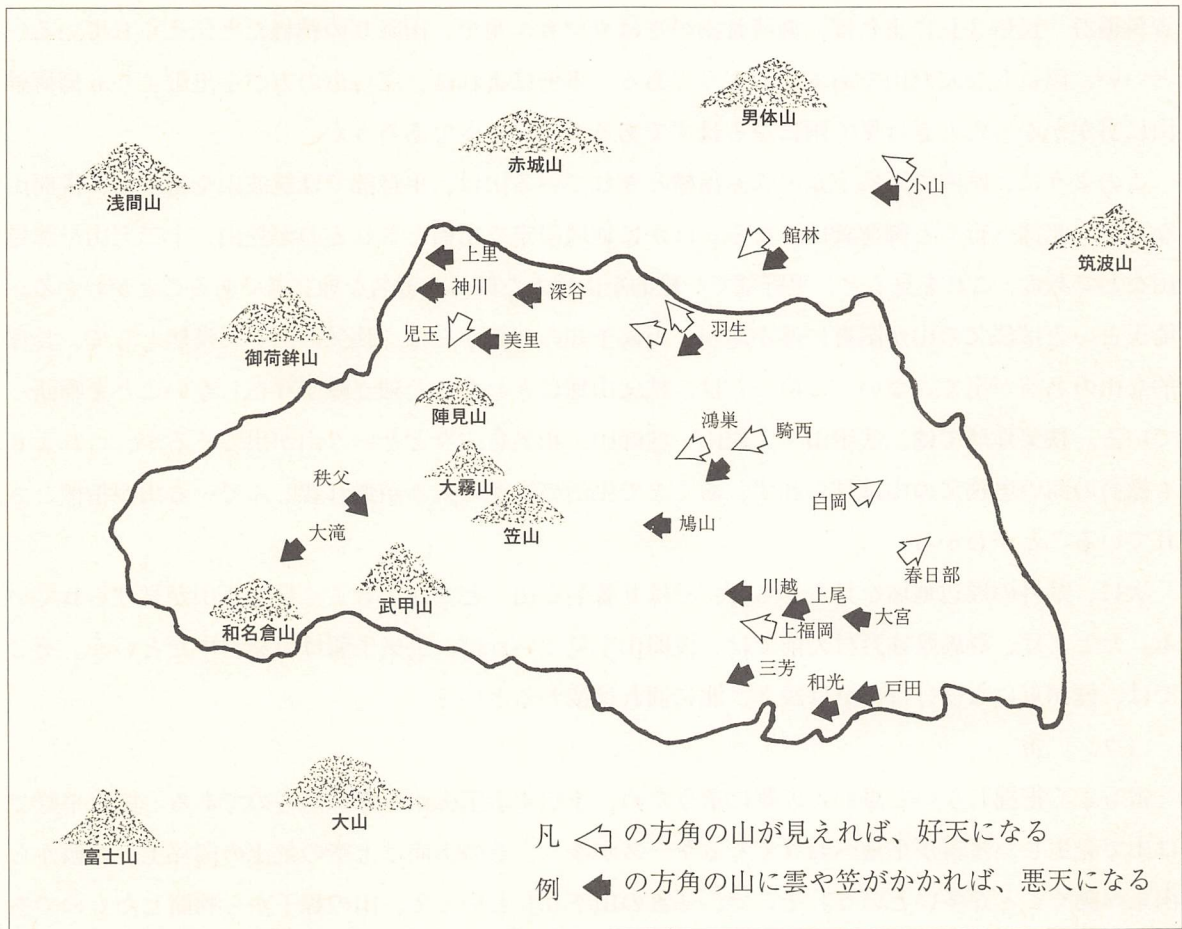


図3 山を指標とした天候予知の概念図

ないうちに夕立雨が降ってくる。

[美里町小茂田]

●御荷鉾の三東雨。

[神川町、上里町七本木]

●筑波山に雲がかかれば雨が降る。

[北川辺町伊賀袋]

●筑波またぎ（虹）は、その日の荒れ。

[大利根町北下新井]

●浅間またぎは、7日の荒れ。

[大利根町北下新井]

大利根町の2つの事例を見ると、筑波にかかる虹は、午後の雷雨によって出てくることが多いという。その日は荒れるが、翌日はたいていよい天気になる。逆に、浅間またぎはおおむね午前中の雷雨上がりで出る。「7日の荒れ」は、悪い天気がしばらく続くという意味を表す。

●三把稲。

[大利根町北下新井]

浅間山の方角に発生した雷雲は襲来の早いことといわれ、このように呼ばれるようになったと伝えられる。この雷雲に気づいてから、稲を三把結び終えぬうちに雷雨になるという。たとえば麦でなく稲であるところが田園地帯である大利根町らしいが、季節としては麦刈りの時期に多く、この雷雲にはとても苦慮したという。

●富士山方面に雷雲が出ると三把稲。

[羽生市井泉、発戸]

●御荷鉾の二東雨。

[深谷市大寄]

埼玉県北部から群馬県南部にかけては、御荷鉾山が雨降りの判断指標とされている。『群馬県史

資料編27 民俗3』によれば、御荷鉾山の主はガマガエルで、雨降りの神様だと伝えられているといひ、雨にちなんだ山であるかのようなのである。事例によれば、深谷市の方が上里町よりも御荷鉾山に雲がかかったときは早く雨になるはずであるが、いかがであろうか。

このように、県内で天候予知の判断指標とされている山は、平野部では筑波山や富士山、浅間山などで、北部へ行くと御荷鉾山になる。ほかに地域限定で指標とされるのが笠山、十二天山や陣見山などである。これを見ると、平野部で一般的な山はみな県外の著名な独立峰であることがわかる。埼玉といえば秩父の山が脳裏に浮かぶが、天候予知の判断からは「秩父の山」と漠然として、具体的な山の名前が出てこない。このことは、秩父山地にきわだった独立峰が存在しないことを物語っている。秩父地域では、武甲山・大霧山・城峰山・和名倉山などという山が出てくるが、これよりも標高の高い奥秩父の山は見られず、あくまで生活の場から人々が慣れ親しんでいる山が指標とされていることがわかる。

次に、県外の周辺地域を見るならば、やはり著名な山、どこからもよく見える山が挙げられている。たとえば、群馬県嬬恋村大前では、浅間山を見ていれば、天気予報は百発百中だという。そこでは、煙が東になびけば天気は続き、北に回れば変わるという。

#### (ウ) 雷

雷もよく把握しないと思わぬ災難に遭うため、予知する工夫がなされたものである。関東平野では山で発生した雷雲が平地へおりてくるケースが多く、その方向は上空の気流の関係上、北西から南東へ動くことが多いという。そこで、「雷の山下り」といって、山の様子から判断したものである。

●西北から来る雷は「板倉の雷電様」といひ、荒っばい。 [草加市]

●夏に北風が吹くと雷様がくる。 [上福岡市]

方向は必ずしも一律でなく、次のように南の方面から来る雷も油断ができないとされている。

●南雷は大洪水のもと、北雷は音だけで雨は少ない。 [滑川町福田]

●神奈川の大山から来る雷は、早く来るから気をつけろ。 [蕨市]

●富士南の雷は荒れる。 [鶴ヶ島市]

●富士の雷様は流れ雨。 [熊谷市佐谷田]

●富士山に入道雲がかかると必ず雷がくる。 [羽生市新郷]

●富士からの雷は、むしろ三枚。 [白岡町]

なお、「空鳴り」といって、ゴロゴロ鳴るだけで雨は伴わないものがある。入間市・鶴ヶ島市・日高市から見て秩父は北西、白岡町から見ると日光は北に当たる。

●秩父の空鳴り。 [入間市・鶴ヶ島市・日高市]

●秩父から出てくる雲や雷は、かなり近づいてきても大丈夫。所沢あたりから南へいってしまう。 [三芳町]

●北の空鳴り。 [蕨市、鴻巣市]

●上州からくる雷は、川越あたりから東へいってしまうので大丈夫。 [三芳町]

●日光の空鳴り。 [白岡町]



●笠山、三峰の雷は音べえで降らない。 [滑川町]

(エ) 風

風もなりわいや日常生活に大きな影響を与えるため、人々はことのほか注意深く観察した。

●冬、富士山に雲がかかっていると風が吹く。 [鶴ヶ島市、川里村屈巢]

●冬場、富士山の南側（宝永山）に雲がかかると強い風が吹く。 [所沢市西新井町、吉見町明秋]

●冬、富士山が見えれば風が吹く。 [羽生市村君、井泉]

●冬の朝に赤城山の山頂に雲がかかっているとからっ風が吹いて寒くなる。 [美里町小茂田]

●赤城山に雲がかかると、風が吹く。 [深谷市上野台、羽生市桑崎]

●男体山が見えれば、西風が吹く。 [羽生市三田ヶ谷、春日部市]

●朝起きたときに、赤城山に雲がかかっていると西風が吹く。 [館林市六郷地区、郷谷地区]

●赤城に雲があると、西風が吹く。 [館林市日向]

●冬の男体山に雲がかかっていると、その日は西風が吹く。 [小山市]

こうして見ると、館林・小山という周辺地域を含め、風の指標とされている山は富士山・赤城山・男体山に集中していること、それに、場所的には平野部の伝承ばかりで、山間地には見られない点が特色である。

イ 鉄道

地域性を示すものとしては、ほかに鉄道を挙げるができる。汽車の音も意外と各地に浸透していて、なかにはここであの鉄道の音がどうして聞こえるのかという事例も見られる。近年はいろいろなものの発達によって騒音がふえたため、昔ほど鉄道の音が遠くまで聞こえなくなったが、古くは「ここでこんなところの音がよく聞こえたな」という事例も見られた。

(ア) 好天の予測

●鴻巣の汽笛が聞こえれば晴れ。 [騎西町種足]

●高崎線の汽車の音がよく聞こえると、晴れる。 [川里村屈巢]

●高崎線の音（元荒川鉄橋）が聞こえれば晴れ。 [行田市渡柳]

●東武伊勢崎線が鉄橋（利根川）を渡る音が聞こえれば晴れ。 [羽生市井泉、発戸]

●西の汽車（東北線）の音が聞こえるときは晴れ、東の汽車（東武野田線）のときは雨になる。  
[岩槻市]

●東北線の汽笛がよく聞こえるときは、天気。 [白岡町太田新井、高岩]

●東武線のポーは、天気。 [八潮市上大瀬]

●東武線の音が聞こえると、天気がよい。 [八潮市伊勢野]

(イ) 悪天候の予測

●京浜東北線の音がはっきり聞こえると、翌日は天気が悪い。 [蕨市]

●高崎線の汽車の音が聞こえると雨が降る。 [上尾市藤波、中分]

●西武電車（池袋線）の音が聞こえると、雨になる。 [所沢市三ヶ島]

●八高線の汽笛が聞こえると、雨。 [入間市]

●八高線の汽笛が聞こえるから雪だ。 [長瀨町井戸]

この言い伝えを聞いたとき、どうして長瀬町から八高線の音が聞こえるのかと不思議に思ったものだった。八高線と長瀬町井戸はひと山越えていて、とてもダイレクトに伝わるとは思えなかったからである。井戸の東側から聞こえてくるとすれば、東武東上線や秩父鉄道も走っているはずであるし、八高線ということがなぜわかるのか。それは恐らく、往時には蒸気機関車が走っていたからであろう。あの独特の警笛から冬場空気の澄んだ時期に東側から聞こえてくると大気が冷え込んで雪になる確立が高かったのだと思われる。同じように、次の事例も山を越えた意外なケースである。

●八高線の音が聞こえると、天気が下り坂になる。 [秩父市栃谷]

●秩父線の音が聞こえると、天気がくずれる。 [吉田町井上]

●八高線の音がよく聞こえると、近いうちに雨が降る。 [児玉町秋山]

●夜、高崎線の汽車の汽笛が聞こえると、次の日は雨になる。 [美里町小茂田]

●秩父線の走る音が聞こえると、くもりか雨になる。 [深谷市上野台]

●東武電車の音（昭和橋鉄橋）が聞こえると、雨。 [行田市渡柳、羽生市新郷]

●栗橋の鉄橋の音が聞こえると、雨。 [羽生市喜右エ門新田]

●利根川鉄橋を渡る電車の音（東武日光線）が聞こえると、雨の前ぶれ。 [大利根町北下新井]

●常磐線の音が聞こえると、天気が悪い。 [八潮市伊勢野]

●松戸のポーは、雨 [八潮市上大瀬]

以上はすべて風向きと音の複合であり、「東風は雨、西風は晴れ」という共通項を見いだすことができる。鉄道の音ではないが、荒川のそばの上尾市平方では、「川越の時の鐘が聞こえると天気」といわれた。平方から見て川越はまさに西方であり、理屈に合っている。こうして人々が親しみやすいたとえを見出しながら、天候予知を一般化したものにとらえることができよう。

## おわりに

天気に関する民俗として、天気占いの行事と天気俚諺について見てきた。このうち、天気占いについては、主に弓占と粥占が埼玉で伝えられていることがわかったが、オビシャ以外の弓占が川越と秩父の山間地にだけなぜ分布しているのかははっきりしない。粥占は、平野部と山間地に分布しているが、その方法は基本は変わらないものの細部に微妙な違いが見られる。このなかで、小鹿野町の諏訪神社の管粥は神官によらず地域の人々の手によって行われている事例として注目されるが、いったいどこから伝わったのであろうか。いずれにしてもこうした占いの結果は人々のなりわいの指針として機能してきたことは事実であるが、近年はマスコミによる正確な情報の伝達の普及や、勤め人の増加によって行事に参加できる人がしだいに減ったことなどから、天気占いも年々薄れがちの風潮という。土地の古老の言葉を借りれば、「若いモンが、もうやめちまうべえと言ったこともある。えれえ時代になったもんだ」ということになる。しかし、こうした逆風にもかかわらず、地域の熱意によって行事が持続されることは貴重である。

天気占いにせよ天気俚諺にせよ、日本人のお天気好きということを差し引いてもなぜ、ことほどかように天気にこだわってきたのだろうか。これにはもちろんなりわいの問題もあるし、災害の対

策もある。こうした現象面に対する構えのほかに、何か先々に安全を求めようとする心情が作用しているのではないかと思う。天気俚諺については、実際の観察から導かれた事実を言い伝えているわけで、何より説得力がある。特に失敗が許されない船頭にとっては、自分自身で見出した知識のほかに職能集団である仲間から取り入れたものも数多くあろう。天候予知については、ややおおげさな言い方ではあるが、それを何度も自身で検証し確認できたものから一般化して後世に引き継いだのではなかろうか。こうした俚諺が着実に定着する背景には秩序づけられた地域のつながりや相互の信頼感さえ感じられるのである。

昨年来騒がれた、Y2Kによる影響は今のところ大きなものは現れていない。しかし、科学がいかに進歩してもこうした盲点が存在することも事実である。このようなときでも先人の残した言い伝えは健在であり、すばらしい知識である。この機会に周りの自然に目を向け、そこから何かを読み取る姿勢を再構築したいものである。

おわりに、各地の伝承を御提供くださった各位に謝意を表するしだいである。

#### 【参考文献】

- 大島建彦「ことわざ」『日本民俗学大系10 口承文芸』1959 平凡社  
桜井徳太郎『日本民間信仰論』1970 弘文堂  
中村利幸『秩父のお天気今昔』1979 小石川書房  
田中正明「民俗知識小考」『八潮市史研究 第3号』1981 八潮市史編さん室  
斎藤武雄『信州の年中行事』1981 信濃毎日新聞社  
倉嶋 厚『暮らしの気象学』1984 草思社  
細田 剛『天気がわかることわざ事典』1991 自由国民社  
『年中行事辞典』1958 東京堂出版  
『日本民俗資料事典』1969 第一法規出版株式会社  
『観・天・望・気—お天気の文化史』1995 埼玉県立博物館  
『雷さまと風の神—くらしとお天気』1999 小山市立博物館  
『老袋の弓取式』1978 埼玉県教育委員会  
『埼玉のオビシャ行事』1994 埼玉県教育委員会  
『埼玉の祭り・行事』1997 埼玉県教育委員会  
『三峰神社誌 民俗篇第二分輯』1969 三峰神社社務所  
『嬭恋村の民俗』1973 群馬県教育委員会  
『わたしのこつ』1976 糸魚川市教育委員会  
『小山市史 民俗編』1978 小山市  
『加須市史 通史編』1980 加須市  
『群馬県史 資料編27 民俗3』1980 群馬県  
『戸田市史 民俗編』1983 戸田市  
『埼玉県入間東部地区の民俗 第6集—信仰・芸能・口承文芸の変貌』1983

- 『荒川村史』 1983 荒川村  
『山古志村史 民俗編』 1983 山古志村  
『滑川村史 民俗編』 1984 滑川村  
『みのやの民俗』 1985 館林市教育委員会  
『皆野町誌 資料編五 民俗』 1986 皆野町  
『長野県史 民俗編第一巻（三）東信地方』 1987 長野県史刊行会  
『草加市史 民俗編』 1987 草加市  
『りょうかみ双書2 祭りと行事』 1987 両神村役場  
『おおしまの民俗』 1987 館林市教育委員会  
『たたら民俗』 1988 館林市教育委員会  
『桶川市史 第六巻 民俗編』 1988 桶川市役所  
『上尾の民俗Ⅰ』 1989 上尾市教育委員会  
『日高町史 民俗編』 1989 日高町  
『神川町誌』 1989 神川町  
『白岡町史 民俗編』 1990 白岡町  
『ろくごうの民俗』 1990 館林市教育委員会  
『南佐久郡誌 民俗編』 1991 長野県南佐久郡誌刊行会  
『鶴ヶ島町史 民俗編』 1992 鶴ヶ島市  
『春日部市史 第五巻 民俗編』 1993 春日部市  
『さとやの民俗』 1992 館林市教育委員会  
『新修 蕨市史 民俗編』 1994 蕨市  
『鴻巣市史 民俗編』 1995 鴻巣市  
『秩父市久那の生活と伝承』 1997 武蔵大学日本民俗史演習  
『上里町史 別巻』 1998 上里町  
『大利根町史 民俗編』 1999 大利根町  
『かわさとの民俗 第二巻』 1999 川里村教育委員会  
『都幾川村史 民俗編』 1999 都幾川村